九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 国際陽明学会、王陽明墓碑修復除幕式、龍場等王陽明遺跡訪問に参加して

海老田，輝巳
北九州工業高等専門学校

https://doi.org/10.15017/18115

出版情報：中国哲学論集. 15, pp.55-67, 1989-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

学界消息

# 国際陽明学会、王陽明墓碑修復除幕式、龍場等王陽明遺跡訪問に参加して

海老田　輝　巳

今年の三月三十日から四月十日まで、岡田武彦博士（九大名誉教授）を団長とする「王陽明史跡・龍場訪問王陽明墓碑除幕式参列訪中団」に加わって、中国の江南地方と西南部を訪問した。訪中団の目的は、王陽明が左遷されて大悟した僻陬の地〝龍場〟及び貴陽、成都、紹興、余姚の王陽明関係の遺跡探訪と王陽明墓碑修復除幕式に参列することであった。しかも今回の訪中の際に、王陽明の生地である浙江省余姚市において国際陽明学会が開催された。これらの中から学会出席、除幕式参列、龍場訪問の三つを中心にして訪問参加順に報告する。

## 龍　場

四月一日朝、貴陽郊外の景勝地〝花渓公園〟にある花渓賓館を発ち、バスで龍場に向かう。途中、貴陽を通るが貴陽までは約三十分、貴陽―龍場間は約一時間二十分かかる。貴陽市街に近づくにつれてセメント、鉄鋼、冶金などの工場が多くなるが、遠くの山々を眺めると石灰岩の産地のせいで山容はテレビの宣伝でよく見る桂林の山々の形と似ていて洵に優雅な感じがする。市街に入ると、セメント、石灰の産地であるため埃っぽい感じがする。しかし清掃が奨励されているせいか、あちこちで家の周囲や道路を掃除する人を見かけた。貴陽は人口一三三万人の工業都市で貴州省の中心地である。貴州省は漢民族以外の少数民族の自治州があり、貴陽市内や郊外で、西蔵族や佈

衣族などの民族衣裳を装った人々をしばしば見かけた。

龍場は、貴陽の中心街から四十公里（四十料）の西北の地にある。途中、修文の街や肩を寄せ合うように佇んでいる数軒の農家を見ながら山また山を越えて行った。土地が痩せているせいか、山々には樹木が少なく、たとえあっても貧弱である。あちこちに麦畑や菜花畑が見られるが活気がなく、明るい陽光が射しているが、言いようのない荒寥たる風景の連続だった。王陽明は、明の武宗の正徳元年（一五〇六）三十五歳、劉瑾によって、この地に左遷されたのである。龍場の生活は、陽明にとっては言語は通ぜず悪疫は流行するといった生命の危険に曝された毎日であった。

龍場は貴州西北の万山叢棘の中に在り。蛇虺、魑魅、蠱毒、瘴癘ともに居り、夷人は鴃舌難語にして、語を通ずべき者は、皆中土の亡命なり。

（『陽明先生年譜』）

王陽明は、正徳三年の春に龍場に到着して、深刻な体認によって「心即理」を体悟し、翌年には、「知行合一説」を提唱したのである。「心即理」を体悟したのは、生命の危機が迫る中で、洞中の石塚の中で静坐してただ聖人の道を求めた結果、一夜、大悟して、以前からの格物致知への疑念が一挙に解決し、聖人の道とは〝わが性に自足するもの〟であることを知ったことによる。この洞窟を、修文陽明洞（『青年旅游手冊』）と現在称しているが、龍岡山の麓にある。龍岡山は樹木が鬱蒼と茂った小高い山であって、周囲は広々とした高原地帯である。陽明洞の入口に二本の柏の古木があるが、最初の木は王陽明みずから植えたものだと言われている。また入口の崖の上には明代の文人の題したものという「陽明先生遺愛処」「陽明別洞」の字迹がある。その他に明末の陽明学者羅汝芳（近渓）の訪れたことを記した文章が洞窟の入口近くに刻まれているのも見られた。貴陽には航空路や鉄道が設けられているが、現在でも濃霧のために飛行不能になったり列車ダイヤが僅少という状態である。まして交通不便の時代には、龍場を訪れることは至難の業であった。因み

龍場陽明洞

に我々一行が龍場訪問をしたのは、日本人では三度目であった。最初は明治時代、二度目に訪れた人は我々より少し以前であって、明治時代の来訪者は陽明学者三島中洲である。

龍岡山の上には、龍岡書院（王陽明が講学した所）、君子亭などの建物があるが、何れも清代の同治年間のものである。山頂からの眺めは良くて修文県の農村風景を一望することができる。龍場の陽明洞や龍岡山で約二時間半過ごして貴陽市内の陽明祠へ向かう。

陽明祠は、貴陽中心街よりバスで約十分ばかり要する所にある。山の中腹に在って途中には貴陽健身院、按摩療養院などの病院があり、陽明祠付近には、我が国の第二次世界大戦後の焼跡に建てられたバラック小屋を思い出させる建物が多い。陽明祠は現在、修理中ですぐ側に二本の木犀の老樹が生き生きとしているのが印象的だった。ガイドによれば、向う正面に大きなテレビアンテナの塔が立っている山の一部が貴陽書院跡である。私は往事を偲んで暫らく佇んでいた。貴陽書院は正徳四年、王陽明三十八歳の時、提学副使（教育次長）席書（元山）と毛憲副が王陽明に師事するために建てられた書院である。

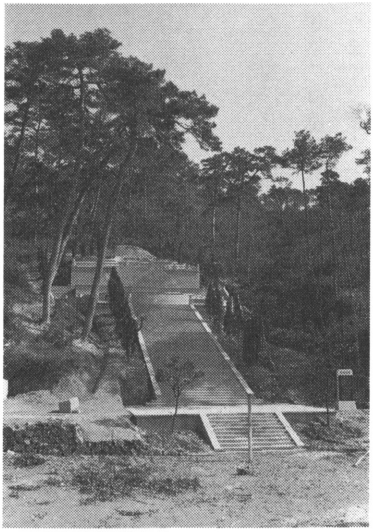
空路で成都に行く予定が濃霧のため鉄道を利用する。約二十時間を要するが沿線の山々や碧く澄んだ渓流や農村風景は瞠目するばかりで寸刻も退屈させない。成都訪問の目的は陽明書院を訪れることであったが、文革期に取り壊されて痕跡すらない。現在、毛沢東の巨像が建てられ、その付近には新しい近代高層ビルが林立している。文革期以前には明代の建物がかなり残っていたといわれる。私はかつての建物の在った街並みを車中で想像するだけであった。

## 王陽明墓碑修復除幕式

王陽明の墓は、浙江省紹興県蘭亭郷花街の鮮蝦山の南山麓にある。四月五日八時に、紹興市内の龍山賓館を発って式場へ向かう。会稽山の麓や紡績工場の側を経て、運河の側の楊樹の芽吹く並木路などを通る。五日は清明節で、墓参する人々をバスの窓から見かける。紹興市内から王陽明の墓地までは十六公里（十六粁）の距離で、山野の緑

や紅の色彩、豊かな水を湛えた運河などが次から次へと展開してくる。洵に悠揚迫らざる江南の春景色である。

王陽明は、嘉靖七年（一五二八）に江西省南安で帰郷の途中に逝去した。弟子の王畿（龍渓）や銭徳洪（緒山）らによって柩がこの地に帰され葬られたのである。その後、明清の各時代に墓が修理され、一九三七年には当地の駐留軍の長官によって碑も建てられた。以後、次第に荒廃したが、八十年代中期以降、紹興県文物部門の人々によって王陽明の墓地が荊棘雑草で足を入れることも困難な中から確認された。一九八六年に、私は王陽明・東林儒者遺跡探訪の一行に加入し、王陽明の墓地を訪ねたが、文革期の徹底的破壊と荊棘や雑草のため確認できなかった。翌八七年には、墓地を蔽っていた雑草が刈り取られ、墓碑の礎石や王陽明の遺骨が納められている場所が明らかになった。また紹興県人民政府と浙江省社会科学院によって王陽明墓碑修復委員会が成立し、一九八九年春に墓碑修復工事竣工を予定して募金活動が開始された。墓碑修復資金は、約七～八百万円（日本円）とし、日本側が約三百万円の援助金を負担することにした。八七年の年末、我が国では、岡田武彦博士が王陽明墓碑建設援助発起人代表となり、全国各地から二百八十一名の援助者によって、三百数十万円の援助金を翌八八年にかけて集めることができた。八八年九月から修復工事が開始され、約半年の期間で、一万人の人々によって、修復距離七十メートル、幅二十三メートル、面積一一五〇平方メートル余りの工事が行なわれたのである。墓地には、祭台、階台、平台が設けられ、墓塚は石砌の大墓で側に「重修王陽明先生墓碑記」と刻された碑が建てられている。


王陽明墓の全貌

除幕式には中国、日本、アメリカの各界の人々が参列した。中国側は、地元の紹興県、紹興市、杭州の浙江省社会科学院はもとより、各地の人々が参列した。日本側は、我々一行三十四名、志賀一郎氏達の訪中団の十数名、中国留学生で、米国側は、鄭学礼博士（ハワイ大学教授・アメリカ中国哲学会副会長）で、式場は多数の人によって

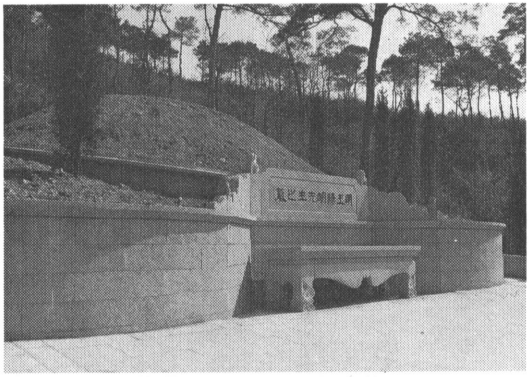
埋め尽くされた。式典は、我々一行のバスが到着すると直ちに開かれた。ちょうど清明節の日であり、爽やかな春風と暖い陽光の照る中で、十一時頃まで続けられた。開式と同時に、修復の報告があり、祭文奉読、講話、記念品贈呈、詩吟朗詠などがあり、盛大な式典で厳粛裡に終了した。

王陽明墓修復の報告
　章　榴先（紹興県副県長・墓修復委員会副主任）
祭文　岡田　武彦（九州大学名誉教授）
　朱　毓秀（中国紹興県政商主席）
除幕式における講話
　福田　殖（九州大学教授）
　王　鳳賢（浙江省社会科学院長）
　俞　国行（紹興市人民政府副市長）

式終了後、王羲之の曲水の宴が行なわれた蘭亭、紹興の禹公廟を訪れて、余姚に向かう。

## 国際陽明学会

四月五日の午後、紹興を発って王陽明の生地、余姚市に着いたのは夕方であった。我々一行の宿泊する余姚賓館で、夜は招待宴が催され、六日は国際陽明学研討会、七日は王陽明が生まれた建物〝瑞雲楼〟と龍山書院などのある龍山公園を探訪した。三年前に訪れた時に比べて近代ビルが各所に建てられ、高層建築が多くなっているのに驚いた。また紹興と余姚の間にはテレビアンテナを取り付けた新しい家屋も多く見られた。三年前の夏に宿泊した市



修復した王陽明の墓

の招待所は鉄筋コンクリートの建物であったが、冷房の設備はもとより冷蔵庫もなかった。余姚賓館は近代建築の高層ビルで、服務員も親切で、中国の各地と同様に余姚市も着々と近代化の方向を辿っているという印象を強く受けたのである。

四月六日、浙江省社会科学院と余姚市政府の共催によって〝陽明学国際研討会〟が開催された。会場は余姚賓館の広いホールで、参加者は、国内国外の陽明学研究者や学界の人々はもとより各界の人々であった。八時二十分から十七時三十分まで行なわれた。最初に主催者側の浙江省社会科学院王鳳賢院長と余姚市政府顧問章奕平氏の開会の挨拶で始まり、最後に沈善洪杭州大学校長の閉会の挨拶で終わった。三氏の挨拶の中で、王・沈二氏のものは学術的な内容を含んだものであった。開会の挨拶の後、ハワイ大学の鄭学礼教授の学術講話「アメリカ中国哲学会の現状」が行なわれ、直ちにその後研究発表に入った。

鄭教授の学術講話は、時間の制約もあって、主として今年の七月にハワイで開催される国際中国哲学会に関するものであった。

研究発表者は、午前中に五名、午後に六名、計十一名であった。題名・発表者を発表順に挙げてみよう。

1　王陽明の中国哲学史上における地位
　　馮　　契（華東師範大学）
2　陽明学の研究と需要
　　岡田　武彦（九州大学）
3　王陽明と余姚
　　諸　　煥仙（余姚市多賢研究会）
4　王陽明と湛甘泉の友情
　　志賀　一郎（国士館大学）
5　王陽明に関する研究と評価
　　黄　　宣民（中国社会科学院歴史研究所）

6　羅念庵の学三変と三游記
　　福田　殖（九州大学）
7　王学主意説論要
　　銭　明（浙江省社会科学院）
8　王陽明と仏教
　　鄭　学礼（ハワイ大学）
9　王陽明の学説の二重性
　　楊　国栄（華東師範大学）
10　陽明学と幕末の思想家
　　疋田　啓祐（二松学舎大学）
11　知行合一について
　　方　爾加（北京中国青年政治学院）

中国では、周知のように、王陽明の死後から清、民国、現代までの永い間、陽明学は、一部の人を除いて、正統思想に対する異端思想とされていることから研究も低調であった。解放後も同様で、文革期には主観的唯心論だと極付けられて迫害攻撃を受けた。文革後の中国の近代化の政策によって、かっての陽明学に対する排斥や貶抑がなくなり偏った観方も是正され、今回の盛況を極めた国際学会を開催できる程の状況に至ることができたのである。中国に比べて日本は江戸時代にすでに陽明学が隆盛で、特に明治維新という日本近代の出発の原動力の役目を果たしている。また米国でも陽明学の研究は朱子学の研究と共に活発である。中国では、文革期の儒教はもとより陽明学の研究などは危険極まる困難の中にあって、浙江省社会科学院や杭州大学などで沈善洪、王鳳賢を中心とする人々の真摯な研究や華東師範大学の馮契教授などの研究が続けられていた。今回の国際学会は、これらの中国の学者による陽明学研究の開花と日本、アメリカの学者を交じえた学問を通じての国際親善の一大行事であった。陽明学

研究が永い間、中国では低調であったが、今回の発表で、中国でも陽明学の理論研究が盛んなことを知った。例えば銭明氏の「王学主意説論要」、方爾加氏の「知行合一について」などを挙げることができる。次に従来の中国における陽明学に対する偏った観方やその制約に因われずに適正な方法によって陽明学を論究している黄宣民氏の「王陽明に関する研究と評価」は、最も印象深いものだった。また馮契氏は「王陽明に関する哲学史上の地位」の中で、日本が明治維新を成功させるのに陽明学が大きく貢献していることを取り挙げていたが、現代の中国が積極的に近代化とそれによる高度成長に努力している状況を目の前に見る状況にいたせいか、私には興味深く感じられた。十一名の発表者の外に、準備していた人がいたが時間の都合で打切られ、沈善洪氏の閉会の挨拶で会が終了した。沈氏の挨拶は学術講話といった方が適切な内容のあるものであった。氏は、王陽明が国際的な学者であることを指摘し、生地余姚で国際陽明学会を開催することには大いに意義があると述べた。次いで一九七〇年代以前に比べて七九年以降の中国における陽明学研究の発展状況などを述べ、さらに今後、陽明学を継続して深く究めるための問題点を提示した。

中国における陽明学は、永い間の諸々の事情で、日本や外国に比べて研究の遅れは否めない。しかし今後は、中国が近代化推進に努めている現状から日本や諸外国の近代化を参考にして陽明学研究が降盛になると思われる。特に明治維新の近代化の一翼を担った日本陽明学を参考にして中国の学術発展はもとより政治、経済の分野にまで活用して多方面の近代化促進に陽明学を活用するであろう。私は、中国政府が近代化、自由化を奨励する限りにおいては、中国における陽明学研究は今後ますます盛んになっていくだろうという念いを味わった。

今回の発表は、時間の都合もあって、全く質疑応答のない研究会であった。また発表の準備をし、かつまた研究論文を参加者まで用意をして会場で配布したにも拘わらず、発表できなかった人々がいた。これらの論文を、王陽

余姚における陽明学国際学会

明に関するもの、王陽明の門弟に関するもの、王陽明と関係のある地域の三つに分けてみた。『浙江学刊』4号（一九八九年・浙江省社会科学院）に、題名を変更し加筆訂正されて掲載されたものが一点だけなので、列挙しよう。

1　王陽明「四句教」義蘊発微
　　董　　平（浙江省社会科学院）
2　王陽明抜本塞源論
　　藤　　復（浙江省社会科学院）
3　心学大師治国能巨
　　銭　念文（寧波市人大）
4　記念王陽明的幾点思考
　　裘　克安（寧波大学）
5　王陽明書芸管規
　　計　文淵
6　論淮南三王、王艮、王襞和王棟兼論泰州学派的分化
　　方　祖猷（寧波大学）
7　浅談王陽明謫居貴州龍場事略
　　王　耀輝（貴州省修文県文管所）
　　雷　華熙（貴州省修文県文化局）
8　王陽明在盧山的紀功碑和山水詩
　　王　憲章（江西省九江政協文史会）
9　王陽明与紹興
　　傳　振照（紹興県委党校協会室）

帰国後、浙江省社会科学院発行の『浙江学刊』4号が、我々一行の団長岡田武彦博士や副団長福田殖九大教授に

送られて来た。幸いに私は福田教授の厚意で拝借することができた。浙江省社会科学院の藤復氏が「偉大的啓蒙思想家王陽明—首次陽明学国際研討会述評」と題して、今回の国際陽明学会の成果を述べている。氏は、「研究方法の深入」、「研究層面の拡張」、「評価認識の突破」の三点が今回の学会の成果であると高評している。第一の「研究方法の深入」では、従来の研究において〝唯物論〟か〝唯心論〟の何れかに規定する方法から思想の内面に論究する傾向や人類文明・文化史の角度に立って研究する傾向が生じたことを取り挙げている。たとえば、馮契氏をはじめとする黄宣民、方爾加、楊国栄、銭明諸氏の中国の学者、鄭学礼氏（米国）と日本の学者達の研究成果を論評している。第二の「研究層面の拡張」では、陽明学における哲学倫理思想、教育思想等の各分野の研究が進展していることを指摘している。一例として余姚市多賢研究会編写出版の『余姚多賢論』第一輯（一九八八年）が刊行されていることを紹介して、中でも諸煥仙氏の論文「論王陽明的工商思想」がユニークで、黄宗義の「工商皆本」の思想は王陽明の影響に依ること等を明らかにしていると高く評価している。また今回の学会で発表した日本の福田、疋田、志賀の三氏を列挙して評価しているが、福田、疋田の二氏についてはかなり詳細に論評しているので紙面の都合上一部を紹介しよう。

関于陽明后学、日本学者做了較為深入細致的研究。九州大学福田殖教授会議上着重談了羅念庵的〝学三変〟之過程与其「冬游記」、「夏游記」和「甲寅夏游記」三篇遊記関係。他認為「冬游記」代表了他早期授受王龍渓良知現成的思想階段、…略…、而其「甲寅夏游記」則代表了他〝晩期直悟仁体〟而超越了王龍渓和聶双江等人的影響、形成自己独立的、成熟的思想階段。

会議成果中最値得注意的一篇論文是日本三松学舎大学教授疋田啓祐的「陽明学与幕末期的思想家們」一文。王陽明的学術和思想播揚海外、尤其対日本近代前后的思想、産生極重要的影響。疋田啓佑的这篇文章詳細介紹了明治維新前的幕末時期陽明学在日本伝播的過程。…略…他們対明治維新的成功在思想和行動方面起了重要作用。其中尤其是池田草庵、他的許多弟子成為支撑明治維新的重要力量。这篇文章是了解日本陽明学発展的極有価値的資料。

なお、志賀氏についても次の様に評価している。

另外、日本国士館大学志賀一郎的関于王陽明与湛甘泉友情的文章、也是極好的資料。

第三の「評価認識の突破」では、最初に陽明死後、清代から近代までの長期間に亘って、陽明学が正統思想に対して異端的存在であると評価認識された経緯を論述し、今回の学界によってこの点が克服できたことを指摘している。さらに日本について、近代以前に中国文化の影響（朱子学、禅学、陽明学）を受け、現在では岡田武彦その他の人々によって陽明学が一大発展していることを賛え、日本陽明学界の王陽明に対する評価は最もすぐれているとして「日本陽明学界対王陽明的評価可謂最高的」と評している。また藤復氏は、今回の学界によって中国と外国の学術界における王陽明に対する評価は次の三点に分類できるとする。第一は「王陽明心学と理学との関係」であるが、浙江人民出版（一九八一年）の沈善洪・王鳳賢共著の『王陽明研究』によってすでに研究が開始されていることを述べ、藤氏自身も今回の学会での自分の見解（論文提出）は大胆なものであると論述している。第二は「陽明学と禅学との関係」であるが、陳俊民（陝西師範大学教授・副校長）と鄭学礼の二氏の研究成果を取り挙げ、特に鄭氏が王陽明の旧来の儒学伝統思想に拘泥せずに仏家と儒家の新しい視点によって新儒学をうち建てた点―現代化の樹立―を指摘したことを、高く評価している。第三は「陽明学の評価とその歴史地位」である。今回の学会では、参加者が一致して陽明学の思想の意義及び地位を高く評価したと、藤氏は指摘して、馮契氏や王鳳賢氏の研究成果を取り挙げ、岡田武彦博士以下、日本の発表者に対しても論評して、さらに今後の陽明学の役割について次のように述べている。

日本学者以岡田武彦代表、也高度評価了王陽明的主体思想。但角度与立場不同。他們立足于日本明治維新以来的実践、比較側重于東西方文明的互補及人類的未来、他認為陽明学的主体性思想講究〝吾性自足〟和親身体験、並通過自我与他物的合一而達致実在。這与西方科学従物我対与分析中穫得実在是不同的。陽明学的簡易直截、是東方思想的極致。由于西方科学的発展、人類将日益変得功利性、並且人与人、人与自然共存的根本原則或道徳、将越来越受到軽視。為救此弊〝受用〟（継承）陽明学、確立根深蔕固的立体性、就変得愈来愈重要。

『浙江学刊』4号には、藤氏の述評の外に、岡田武彦、鄭学礼、志賀一郎、福田殖、疋田啓佑の日米両国の発表者の論文が掲載され、引き続いて次の諸氏の論文が掲載されている。これらの中には、当日発表していないが後日、

提出されたもの、発表時の題名を変更したものなどがあるので、これらを掲載順に挙げてみよう。

王陽明在中国哲学史上的地位
　馮契
関于陽明学研究方法的幾個問題
　沈善洪
重新評価陽明心学的積極意義
　王鳳賢
王学精神的時代意義
　陳俊民
関于王陽明的研究和評価
　黄宣民
王陽明教育思想幾点意義
　裘克安
論王学内在的二重性
　楊国栄
王陽明論〝理是一個過程〟
　李志林（華東師範大学）
王陽明的〝知行合一説〟
　方爾加
王陽明与余姚
　諸煥仙

最後に岡田武彦、福田殖、疋田啓佑の三氏の今回の学会で発表した内容の一部を『浙江学刊』4号よりそれぞれ

抄出しよう。これらは何れも論文の最終の部分である。

今后的世界情勢会是怎様的呢？首先応該看到、科学和技術将取得不可想象的進歩。人們如果不掌握更多的才能和知識就不能応付時代的変化。結果、才能和知識就会越来越受到重視。…略…随着情報化的過密、人們内在的真正的主体性会喪失、就会変成孟子所説〝蔽于物〟的那種状態。為救此弊、更進一歩簡易直截、確立根深蒂固的主体性、自然変得越来越心要了。以此方式来思索、在受用陽明学時、受用什麼、怎様受用不是很清楚了嗎？

（岡田武彦「陽明学之研究与受用」）

念庵論為対一任現在的良知下去、可能落入真偽混雑与狂蕩的王学左派、只有用白沙〝主静収斂説〟能救其弊、這様才能発揚陽明良知説的本旨。念庵的〝主静収斂法〟可以説是対症下薬的方法論、是作為〝現成説〟的修正理論。所以、融滙了王龍渓系統的鄧定宇認為念庵是〝王門的嫡派〟、而高度進行了評価、並且受到了新朱子学者、新王学者的共同尊敬。

（福田殖「羅念庵的〝学三変〟与〝三游記〟」）

在歴史舞台上既未表現又無栄輝可言的草庵、他的弟子中很多人⑪却在社会上出類抜萃、大放光彩、成為支撐明治維新的真正的力量、正可従草庵及其教導中尋出。因此、我們認為有必要対這些在歴史的背后踏踏実実地実践陽明学的人們、作出応有的評価。

注⑪据記録載、草庵書院学習過的人共六百七十三名。学生身分従公卿、大名的児子至武士、百姓（農民）家的孩子都有、但大半都為平民。地区則包括了関東至九州的広大地域。后活躍在社会各界並出了名的有北垣国道（北海道長官）、浜屋新（東京大学総長）、久保田譲之助（文部大臣）…略…等々、兵庫県日本北側郷村、真可謂人材輩出。

（疋田啓佑「陽明学与幕府末期的思想家們」）